▲ヴァティカンのシスティーナ礼拝堂を環境空間ごと立体再現。★

支部見聞録（四国支部）

From 徳島

◎秋季大会拡大版

西洋の名画が一堂に

大塚国際美術館の挑戦

徳島県鳴門市、淡路島と四国を繋ぐ大鳴門橋にほど近い場所に、陶板技術による名画の複製を展示する、世界で唯一無二の美術館がある。質感や筆致まで再現した名画を一堂に集め、陶板画だからこその数々のメリットを活かした大塚国際美術館。その魅力は、そして設立にこめられた思いとは――。

▲国立公園にあるため建物は地中に展開、地上部の高さを抑えている。

陶板による再現だからこそ、可能になった展示

足を踏み入れた巨大な空間の中で、言葉もなく立ち尽くしてしまった。正面の壁には「最後の審判」が、はるか上方にある天井には「天地創造」をはじめ、旧約聖書の世界がダイナミックに描かれている。そこにはルネサンス芸術の最高傑作のひとつとされるミケランジェロ渾身の作が、ヴァティカンのシスティーナ礼拝堂の空間そのままに再現されていた。ここ大塚国際美術館には、教会や古代遺跡の壁画などを環境空間ごと再現した環境展示12点を含め、古代から現代に至るまで西洋名画の至宝1,000余点もの絵画が常時展示されている。古代は青柳正規氏、ルネサンスは故若桑みどり氏といった風に、各時代に精通する学者が絵画を選定・監修。美術館の広報担当者によれば、「西洋美術史の中で、見るべき重要な作家や作品をほぼ網羅しています」。展示は「環境展示」と時代や様式ごとに配置した「系統展示」、時代を超えてテーマ別に作品を集めた「テーマ展示」の3つから成り、西洋美術への理解を深める構成となっている。

陶板による複製の再現性は、驚くべきものだ。モザイク画の凹凸や、壁画の亀裂や剥落、油絵では表面の質感や光沢、細かなひび割れ、絵の具の盛り上がり、筆の微妙なタッチまで見事に表現されている。複製技術のベースは陶板への印刷技術の応用で、オリジナルを写真撮影して4色分解し、シルクスクリーンで陶板に転写して焼成する。さらに絵の具の盛り上がりや筆使いなどをレタッチ（加筆）して焼成することを繰り返すのだという。陶板は最大で3m×90cm。壁画や大作では継ぎ目が出来るが、それがなければ到底複製とは思えない素晴らしさだ。

陶板は熱にも湿気にも強く、退色も劣化もしないので、製作時点の原本の状態を半永久的に留めることができ、屋外での展示も可

Family 2015 366号

CONTENTS

●支部見聞録（四国支部）…… 2
From 徳島［秋季大会拡大版］

●LS研総合発表会2015 …… 6

●ICT基礎講座Close-Up …… 10
インバウンド観光× ICT

●トップは語る …… 14
SHO-BI株式会社
代表取締役社長　寺田 正秀 氏

●講演録 …… 16
東京大学工学系研究科教授
元橋 一之 氏

●豊かに生きる誌上セミナー …… 18
HUMAN HUMAN
メルシャン株式会社
シャトー・メルシャン ビジターセンター長　上田 敦史 氏

●Family's Information …… 19

▲モネの「大睡蓮」は屋外に展示。自然光で鑑賞できる。★

▲A:スクロヴェーニ礼拝堂での現地調査の様子。

▶「ヒマワリ」の部分。絵の具の盛り上がりや筆致、微妙な色の変化も再現。★

▲ゴッホ「ヒマワリ」。1945年に焼失した作品を見事に蘇らせた。★

◀B:焼成の様子。

▶C:レタッチ→焼成を繰り返した後、取り付ける。

A・B・C写真提供:大塚オーミ陶業株式会社

◀▲床モザイクの上を歩いたり間近で作品の細部を確かめたりすることもできる。★

能だ。オリジナル作品を見ようとすれば時間と費用を要する上に、混雑や時間制限、絵画保護のために薄暗くしてあるなど数々の制約があるが、ここでは思う存分鑑賞できる。柵もなく間近に細部を見るのも作品と一緒に記念撮影も自由。レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」は、1977年から99年にかけて大々的な修復が行われているが、美術館が開館した1998年は修復の途中であったため修復前の状態の作品が展示されていた。開館5周年の際、修復後の同作を追加。修復前と修復後の状態双方を同じ部屋で向かい合わせに展示して、対比しながら鑑賞できるのもここならではだ。また、睡蓮の絵で知られるモネの代表作「大睡蓮」を屋外展示し、モネ自身の「自然光の中で絵を見てほしい」という望みをかなえている。

地元のため、未来を担う子どもたちのために

大塚国際美術館は、大塚製薬を核とする大塚グループの創立75周年事業として1998年に設立された。絵画の製作を担ったのは、グループ会社の一つである大塚オーミ陶業だ。陶板製造は44年前、建築用材にトン単位で売り払われていた創業地徳島の海岸の白砂を、付加価値をつけて活かそうという思いからスタートしたが、直後にオイルショックに見舞われてしまう。そこで活路として見出した道が大型美術陶板や写真陶板などへの特化だったという。複製絵画の美術館をつくるという構想が生まれたのも、研究と改良を重ねて実現したすぐれた美術陶板・写真陶板の技術があってこそのものだ。

「構想を聞いた時には、そんな美術館が作れるものかと驚きました」と、設立から関わってきた大塚国際美術館常務理事の田中秋筰さんは語る。幸い監修を依頼した先生方から「夢のような計画だ」と熱い賛同を得ることができ、その口聞きもあって各美術館やイタリア政府などとの交渉は比較的スムーズに進んだ。難しかったのが美術館と遺族双方の許可を必要とする現代絵画だ。パブロ・ピカソの子息には、日本に招いて陶板製作の現場を見てもらったという。「誠意と技術の高さのおかげで、門外不出のゲルニカの複製まで了承をいただきました」。

大塚国際美術館は、構想からオープンまで10年強をかけたビッグプロジェクトで、全展示を順に見ると4kmを歩くことになるが、「いちばんの目的は、創業地である鳴門市、徳島県への恩返しでした」と、田中さんはいう。また、観光客を呼ぶことで地元に貢献しようという意図以上に大切にしているのが、地元の子どもや学生たちに世界の名画に触れる機会を提供することだ。画集や教科書ではわからない絵画のスケールや質感に触れ、美術はもちろん世界の文化や歴史への関心を広げ、世界に目を向けてほしい。未来を担う子どもたちへのそんな思いが、1,000点余もの名画を展示するこのユニークな美術館に託されている。

◀ジョットのスクロヴェーニ礼拝堂。現地調査・撮影した上で再現が行われた。★

▲レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」。左側が修復前、右が後世の加筆部分を除いた修復後。★

★の写真は、すべて大塚国際美術館の展示作品を撮影したものです。

取材協力／大塚国際美術館

別冊 FROMはウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください!
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/

失われたゴッホの「ひまわり」再現の物語をご紹介。

FUJITSUファミリ会

2015年度 秋季大会

▪ 開催予告 ▪

本年度の秋季大会は四国支部で開催いたします。
正式案内の前にいち早くご案内いたします。
皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

開 催 日　2015年11月19日(木)～20日(金)
会　　場　サンポートホール高松 /JR ホテルクレメント高松
募集定員　1,000名

スケジュール(予定)

11/19(木)

特別講演

高知県立坂本龍馬記念館　館長　森 健志郎 氏

記念講演

演出家　鴻上 尚史 氏

セッション(3会場)

1. 大豊産業株式会社　代表取締役社長　乾 篤之 氏
2. LS 研究委員会 2014 年度分科会　最優秀賞受賞発表
3. 富士通からの情報提供

懇親会

11/20(金)

交流行事

視察コース

四国四県を満喫できる 4 ～ 5 コースを予定

ゴルフコース

著名なゴルフコースを予定

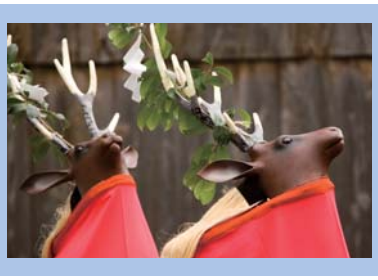
開催まで、四国の情報を随時発信してまいりますので、ぜひご覧いただき、秋季大会にお越しください！

秋季大会 Facebook OPEN！

遠来のお客様をスマイルでおもてなし ?! 高松駅

徳島県阿南市の橘湾。「阿波の松島」とも言われ、大小多くの島が浮かんでいる風景はなかなかのもの

https://www.facebook.com/FujitsuFamily2015Shikoku



表紙のことば
(日本の祭りシリーズ)

八ツ鹿踊り(やつしかおどり)
愛媛県宇和島市

八ツ鹿踊りは、宇和島地方に古くから伝えられている350年余の伝統を持つ無形民俗文化財である。源流は宮城県の雄鹿たちが雌鹿をたずね探して遂に発見して喜ぶ「めじしかくし」に由来し、太鼓を胸に抱えて打ちながら踊る姿とともに宇和島に定着したといわれる。10月の宇和津彦神社の祭礼日には、鹿の頭をつけた12～13歳の少年が紅染の布で上半身を覆い舞う姿が見られ、哀愁を帯びた旋律とともに観光客を魅了する。